

リブロン・インタビュー

ひと、燦く

心の扉を開け、世界を広げる

民族音楽の魅力を共有しましょう

民族音楽家 ロビン・ロイドさん

親指ではじいて音を奏でる「カリンバ」をはじめ

世界各地の打楽器や笛、弦楽器、そして数々の工芸品…。

これまでに世界50か国以上を訪ねたという

ロビン・ロイドさんのお宅はまさに無国籍。

見知らぬ楽器がずらりと並ぶお部屋で

「音楽が大好き！」というあふれるほどの思いと

やさしさに満ちた笑顔に触れることができました。

トルコなどで使われる「ダラブッカ」という打楽器を構えるロビンさん。木彫りの人形に見えるのも「カリンバ」の一つ

音楽

まずはロビンさんと音楽の出会い、さらには世界の民族音楽との出会いを伺ってみました。

—そちらに飾られている写真はお父さま・お母さまでしょうか。

ロビン そうです。私の父親は戦争が終わってイギリスからアメリカに来て、ジャズのミュージシャンをしていました。そして母と出会い、結婚して兄、姉が生まれて。私が生まれるころにはサラリーマンになっていましたが、家の中にはいつも音楽がありました。

—音楽に興味を持たれたのはお父さまの影響なんですね。

ロビン はい。4歳のときのサンタからの



若かりし日のご両親の写真に見守られて



ロビンさんのCDアルバムはカードや小冊子がセットされていて、目で見て楽しめる作品になっている

クリスマスプレゼントはドラム。ギターは7歳で始めました。父から「これをやりなさい」というのは一切なかったですが、自分から「やりたい」と。音楽が好きで、海外に住んで…。兄弟の中でも私がいちばん父に似ているようです。

—そこから世界の民族音楽に興味を持つようになったきっかけは？

ロビン わかりやすいのは、10代のころに出会ったビートルズです。ビートルズのジョージ・ハリスンが、インドのシタールをレコードに入れたんですね。

—「ノルウェーの森」などの楽曲ですね。

ロビン はい。あの音を聴いて「これは何?」。人生がひっくり返るぐらいの衝撃でした。6弦のギターでもこんなに難しいのに、シタールは20弦。ギターで弾くポツ

プスは3分程度だけど、インドでは何時間も弾き続ける。レコードやカセットを聴くだけではわからない。高校を辞めて早くインドに行きたい、でも両親は「ダメ」と。

—ある種の「熱病」のような…。

ロビン そう。いまままだ治っていません(笑)。

日本

日本に定住した理由、日本語学習で苦労したことは?、そんな質問をすると、愉快なエピソードも飛び出しました!

—日本には、どのような経緯で来られたのですか。

ロビン 大学生のころ日本人の留学生と知り合って、「ぜひ日本にも来て」と言われ、インドに行く前に立ち寄ったのが最初です。日本では尺八や三味線を教えてもらって。それからインドとかいろんなところへ行って「さあ帰ろう」となったときに「アメリカに帰るか、日本に帰るか」。それで台湾にも行きたかったのですが、日本から台湾に行く、また戻るときにも「アメリカに帰るか、日本に帰るか」。その繰り返しで、結局、京都に住むようになりました。

—いまは流ちょうな日本語で話されていますが、そのころは?

ロビン 最初は全くわかりませんでし



アフリカン装飾が施されたカリンバは、それぞれが違う音を奏でる

た。日本語学校に行く予定だったけど、音楽に一生懸命だったので…。ふつう日本語は「あいいうえお」で勉強するでしょう。でも私はその順番を知らなくて、よく行く食堂のメニューで覚えました。いちばん上は「きつね」、意味を調べて「そんな肉を食べて大丈夫?」。次は「たぬき」、これもまた…(笑)。でも、日本は食べ物もすごくおいしかったです。

—それは良かったです!



ひとつ、燦く

リブロン・インタビュ



バオバブの実で
作った楽器



「親指ピアノ」とも呼ばれるカリンバは、
金属の棒をはじいて音を出す。オルゴール
のルーツともいわれている

癒やし

素材で心安らぐ民族楽器の音色。その中
には人びとを癒やす、やさしい力が秘め
られています。

「ロビンさんがよく演奏されている「カ
リンバ」について教えてください。

ロビン アフリカ南部・東部で作られて

いる、鉄の棒を親指で
はじいて演奏する民
族楽器です。ジンバブ
エでは700年ぐら
い前から生活道具の
ために作った鉄の棒
が使われるようにな
りましたが、それ以前
から別のものを使って
作られていました。音
が自分の方に響く感
じで、人に聴かせるよ
り、自分のための楽器
ではないかと思いま
す。仕事で疲れて家に
帰って、寝る前に自分
のために弾く、という
ような…。

—確かに、穏やかな音
色に癒やされます。

ロビン この楽器は
棒の長さを変えるこ

とで音を高くしたり低くしたり自分で
決めます。現地の人からすると「ドレミ、
それは何ですか、だれが決めたんですか」
と。西洋音階は500年ぐらいい前、ヨー
ロッパで生まれたもの。たまたまヨーロッ
パの文化が広まったから日本もアメリカ
も使うようになっただけです。

—指ではじくと簡単に音が出せるのは魅
力ですね。

ロビン 西洋の楽器は音楽が得意な人
と苦手な人に分かれるけど、カリンバは
だれでも弾いて楽しめます。バックパッ
クにカリンバを一つ入れて旅をすれば、友
だちもできます。大きな音がしないので、
あまり近所迷惑になりませんから、日本
にも合っていると思います。でもね、母は
「なぜアメリカ人のあなたが、アフリカの
音楽を紹介して、日本で生活できている
の？」と不思議がっていました。

—そのカリンバの演奏活動をする一方
で、音楽を健康維持やリハビリに活用す
る「音楽療法」にも携わられていると伺っ
ています。

ロビン はい。少しずつその仕事が増え
て、いまは小さい子から100歳前後の
人まで仲間になりました。

—具体的にはどんなことを？

ロビン ライブでは自分が好きなもの、
聞かせたいものを演奏して、バリバリに
カッコ良いところを見せたい(笑い)。です



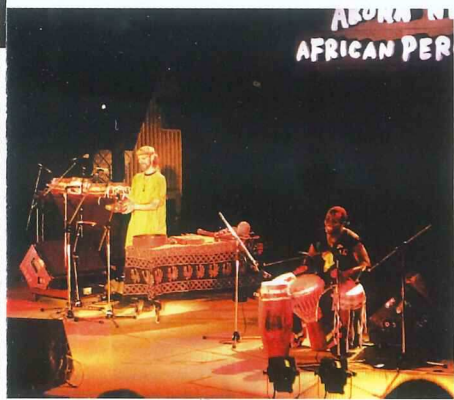
指1本でも音が出る小さな楽器も

が音楽療法は違います。「相手が聴きた
いもの」を探すのです。例えば特養老人
ホームには、若いころからバツハを聴いて
きた人もいるし、演歌が好きという人も
います。「今日はみんなでこの曲を歌いま
しょう」というのではなく、もつと二人
ひとりに寄り添う感じでやっています。
耳が遠くなっている人には耳もとに楽
器を近づけて。手に障害がある人には、
1本の指で音が出せるものを使って、今
日はこの指で音が出せたから、次は隣
の指で、と。家族の人とも相談しながら、
1年2年かけて…。

—そうした面でも民族楽器の多様性が
生きてくるのですね。



幼児から年配の人まで、音楽を通して
コミュニケーション



ライブでは、さまざまな民族楽器、洋楽器とのセッションも楽しんでいる



お茶

お茶や散策など、暮らしの中でロビンさん自身の「癒やし」になっている時間について語っていただきました。

— 京都から神戸にお住まいを移されたのはいつですか。

ロビン 2年ほど前です。京都はすごく良い町で、アーティストも多くて、良い刺激がいっぱいありました。ただ長く住んだので、世界を広げてみよう。いまは兵庫県での仕事も多いので、住むところを探してこの辺りに来たとき、すごく静かで、それが逆に刺激になったんです。六甲山のハイキングコースの入口もすぐそこ。有馬温泉までも歩けるそうだから、歩いてみたいです。

— 自然が好きなんですね。

ロビン はい。毎年、瀬戸内海の小さな島で子どもたちと一緒に楽器を作るキャンプをしているんですが、鳥の鳴き声、風の音、波の音を聞いて…。それも楽しみなっています。

— 喫茶店めぐりもお好きだとか。

ロビン そう。お茶を飲みながら文章を書いたり、考え事をしたり。自分の世界に入っています。特にチャイ(※)を飲むと、いいアイデアが浮かびます。イギリスには、いちばん早く起きた人が、大きなポットでお茶を作っておくという古い習慣が



あります。父がイギリス人だったから、アメリカのわが家でも、毎朝起きたらそのお茶をカップに入れて、ミルクと砂糖を入れて飲んでいました。いまは中国や台湾、日本のお茶も大好きで、私の生活には欠かせません。

— ところで携帯電話を使われていないそうですね。電話がかかってくる、集中力が消えてしまうでしょう。目の前のこと、例えば今日ならあなたの方との時間に集中したい。だから私は携帯がなくても大丈夫。でも相手に迷惑をかけてしまうこともあるので、そろそろ持とうかな、と。

— 自分ではなく相手のため…。そうしたやさしさもロビンさんらしさですね。今日は本当に良い時間をありがとうございました。



ツノ笛は、オカリナのようなやわらかい音がする

プロフィール

◆ ロビン・ロイドさん

1955(昭和30)年、アメリカ・イリノイ州に生まれる。10代のころワールド・ミュージックに興味を持ち、大学卒業後はアジアを拠点として活動。カリンバや打楽器、管楽器などさまざまな民族楽器のマルチプレイヤーとして、ソロアルバムのほか数多くのCD制作に参加。楽曲はNHK「日曜美術館」など、テレビ・ラジオの番組内でも使用されてきた。ホームコンサートから会場までさまざまな演奏会に出演。一方で民族楽器を使っている音楽療法の実践、普及、指導にもあたっている。

ロビン・ロイドさんのHP <https://robbin-muse.info>



文章を書くのも好きなロビンさんは、僧侶でイラストレーターの中川さんとのコラボで絵本を出版。新しい本は来春、ミシマ社より発売予定